
慈 恵



平成26年 夏季号

No.47

宗教法人 慈 恵 院

付属 多磨犬猫霊園



遠く山を看れば色有り
近く水を聴けば聲無し

雲母老衲

気合充実し、清水のごとき流水の中に、稜々たる骨気と颯々たる清風を起す。天地左右の余白も手伝って、ゆったりとした中にも凜平とした禅機がほとばしり、見事な二行書となった。

それにも増して「雲母老衲」が、すばらしい手を忘れ、心を忘れた無為の筆は、いのちと共に躍り、自在に舞う。

その跡は、澄んで深く、殺活縦横だ。これが、滴水禅の真面目に相違ない。

「禅画報」より

沢水の説法

沢水和尚は、昔の善知識の説法をかりて修禪者を激励するのが得意であった。

その中でも、よくお釈迦さまの説法をかりて修禪の心構えを説いた。

「昔、世尊はこういわれた。『汝ら修行者が、つとめて精進したならば、何事も困難なものはない。たとえば、小さな水の流れであっても、つねに流れ続けて大きな石をうがつようなものだ。汝らが、もし木をきりもみして火をおこそうとするならば、休みなくもみ続けることだ。そうすれば必ず火はおきる。もし途中でやめてしまえばなんで火を得ることができないか。工夫もまたこのようなものだ。汝ら決して怠るのではないぞ』と」

沢水和尚が参徒に示した和歌がある。

なにごともしうべきことはなかりけり

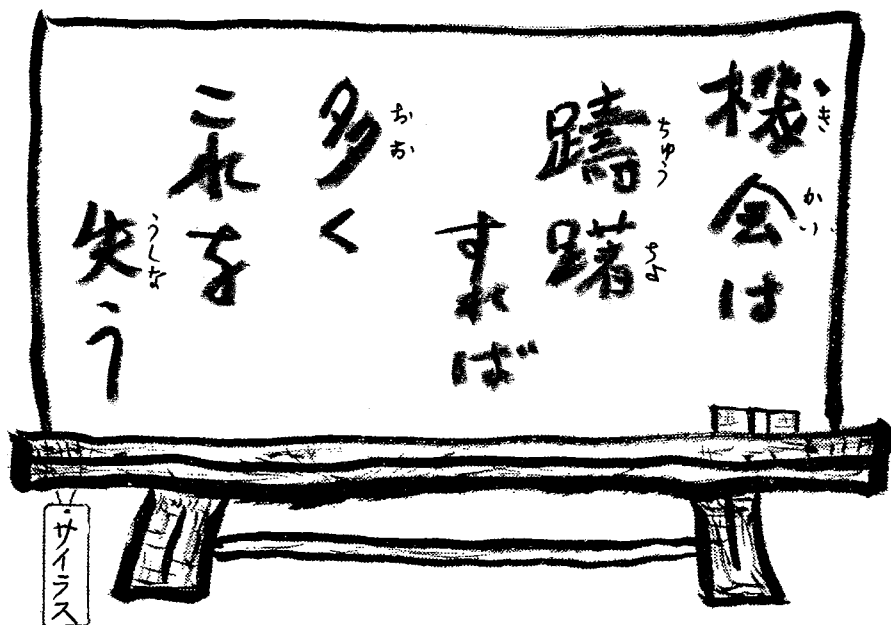
問わで答うる松かぜの音

「禪門逸話集成」より

沢水長茂（？～一七四〇）

臨済宗。越後の人。初め上杉謙信に仕える武士であったが、のち出家した。拔隊得勝に私淑し、その宗旨を会得したという。のち亀庵珠光に謁して、その印記を受く。江戸の大住庵に住す。

掲示板





愛猫との思い出

町田市 都田 由美

去る12月21日、長年連れ添った愛猫（ミーコ♀）が静かに息を引き取りました。19歳でした。

冷静に眺めれば、猫にとつて19年という年月は長寿であった、老衰で大往生だったから、と幸せだと思えるのかも知れません。

でもやっぱり、いざ身近に連れ添ってきた者となると、そんな気持ちで少しも穏やかにはいられない。そんな諦めより、もつと長く元気でいて欲しかったという強い思いだけが胸の中

ですつと響いています。

弱り始めたのもつい最近のこと。12月初旬、徐々に食事を摂らなくなり、いつの間にかどんどん痩せてゆきました。先月まで、いつものように台所にある水を飲みたいと元気にジャンプする姿、気ままに寝起きしては、夜中に鳴いて人を起こすおてんばな姿。甘えん坊そのもので、仰向けでおなかを撫でられながら、目一杯に口を開けてあくびをしていたのに。

たった一ヶ月少しのこと。どれも今となつては日常ではなくなりしました。

でも、この一緒に過ごしてきた19年という長い歳月が、別れる時の大きな大きな悲痛を残していったのと同時に、私と愛猫にとつて、当たり前前にそれが「家族」であるという安心感、絆をもたらししてくれた月日だったのだと改めて感じさせてくれました。

この悲しみの大きさが、逆に愛猫が今まで私にくれた大きな安心感と絆、そして一緒にいられた楽しさだったのだと思います。

悲しい気持ちが落ち着いたら、今度は大きな感謝の気持ちを送りに行きたいです。

19年。ずっと一緒に過ごせて、本当に楽しかったし困らせられたりもしたけど、本当は助けてもらつてばかりでした。

ミーコありがとう。

小金井市

ペンネーム 藤(66)

四男坊と称していた柴犬の姿が我が家から消えて一ヶ月経ちました。十五年半はかり知れない癒しを与えられていたのを思い出しました。

人の死では諦めもあり、涙も

ほとんど出なかったのに朝、息をしない様子に取りすがつて号泣しました。「子どもではないのだから・・・」と言われますが、数年経てば自分の世界を持ち親から離れていく子供と違い、ペットという時間は密です。全幅の愛情と信頼も変わりません。

老犬と言われる年になり、寝ている時間が多くなつて以来、遠からずその日が来るのはわかっていました。辛さを克服できない毎日です。忙しさに紛れたり、楽しい時はひととき忘れられても、リビングの空間や思い出に繋がる物を見ると悲しみが襲います。特に朝起きた時、外出から戻った時、彼のぬくもりを感じられない寂しさ……。もつともつと一緒にいる時間を大切にすれば良かったとの後悔も。最後の二ヶ月くらいは散歩ができず、排泄もシートから外す

ことが多くなり、後始末が大変にもなりましたが、生きていてくれるだけでありがとう」と夜中に起きることも手がかることも苦ではなく、寝たきりになったからの覚悟もできていました。時間的にも身体的にも余裕ができたのに気力が出ない抜け殻状態の日々です。

沢山の思い出と癒しへの感謝は言葉に表せません。私が行くまで仲良しさんと遊んで待っていてね。

五月の七海ちゃん

日野市 相澤 京子(64)

五月三十日ついにその日は来た。五月一日に倒れてから丁度一ヶ月、最盛期には39kgあった黒いラブラドル。四肢が動かなくなり寝たきりの状態になっ

てしまった。いつかこうなる日が来るのではと覚悟はしていたが、実際の介護の大変さより、動けずにいる七海が可哀想で話しかけては涙するばかりでした。主治医からも「あまり永くないと思うよ」と言われましたが、立ち上がれないだけで食事水分もきちんをとれて尿、便もきちんとなりました。オムツもいろいろ工夫して人間用の尿取りパットとオムツを使いこなして、多いときには一日八回オムツ交換しました。何よりも主人が協力して早朝、私が疲れて起き上がれない時でもオムツ交換をがんばってくれました。毎日温かいタオルで身体を拭いたり、身体向きを変えたり、天気の良い日には庭に出して太陽に当て、風が吹けばそれとばかりに又家の中にと重い彼女を毛布でくるみ、主人と呼吸を合わせて抱える日々でした。

十五歳のお誕生日にはいつものようにバースデーケーキもしつかり食べて、そんな光景にこの状態で「永くなるのでは」と思ったりもしましたが、やはり血尿が出たり、水分の摂取が少なくなったりで確実に一歩ずつ終末期になって行きました。

その頃、七海がいなくなったら我が家は猫の九ちゃんだけになつてしまう。これも七海が散歩中に拾って連れ帰り人工母乳で育てた子です。猫一匹だけの生活は考えられないと思い始めていました。偶然にも知人宅のベランダで入院中に猫が居つて子猫が生まれたと聞き、様子を見に行き二匹を確保しました。

知人が用意してくれたかごに入れて帰宅すると七海が息絶えていました。何という偶然か巡り合わせか？チビ猫が入っているかごを玄関に置いたまま、「七海ちゃんどうして」と呼びかけ

ながら涙が溢れて主人に電話しても声になりません。五月三十日チビ猫が来た日に七海が旅立ちました。今思うと彼女は自分亡き後、私と主人が落ち込まないように新しい家族を引き合わせてくれたと信じています。

葬儀が終わってからは悲しさの中にもチビ猫二匹の人工母乳に追われ、少しホッとする日々を過ごすことが出来ました。今チビ猫は三ちゃん、五ちゃんになりました。そして又偶然？今年五月一日からパグの八幸が家族になりました。七海を通して本当に多くの子が引き寄せられたと思います。

私たち夫婦も初老期になり、この小さな家族とこれから健康で過ごして行きたいと思っています。

七海ちゃん十五年一緒に生活できてありがとう。そして慈恵院様これからもお世話になります。